資料２

ミラノ・コルティナ冬季大会検証会

日本パラリンピック委員会

Japanese Paralympic Committee

01 大会概要

大会名称	ミラノ・コルティナ2026パラリンピック冬季競技大会 「MILANO CORTINA 2026 Paralympic Winter Games」
大会期間	2026年3月6日(金)～3月15日(日)(10日間)
開催地	イタリア共和国　ミラノ、コルティナ、ヴァル・ディ・フィエンメ
参加国・地域	55か国・地域(過去最多)
開催規模	6競技79種目(前回78種目) 参加選手数611人(過去最多) ※IPC公式サイトより(3/15時点)
特記事項	● パラリンピック冬季競技大会50 周年という節目の大会 ● 2都市をまたぐ「広域分散開催」として実施され、選手村も3エリアに設置 ● 9月のIPC 総会でロシア・ベラルーシ両国の加盟権が完全復活し、国旗・国歌を使用しての参加が承認された。今大会には両国から計10名(ロシア6名、ベラルーシ4名)が出場したが、この決定に反対するウクライナなど7 か国は、開会式の入場行進への参加を見送った

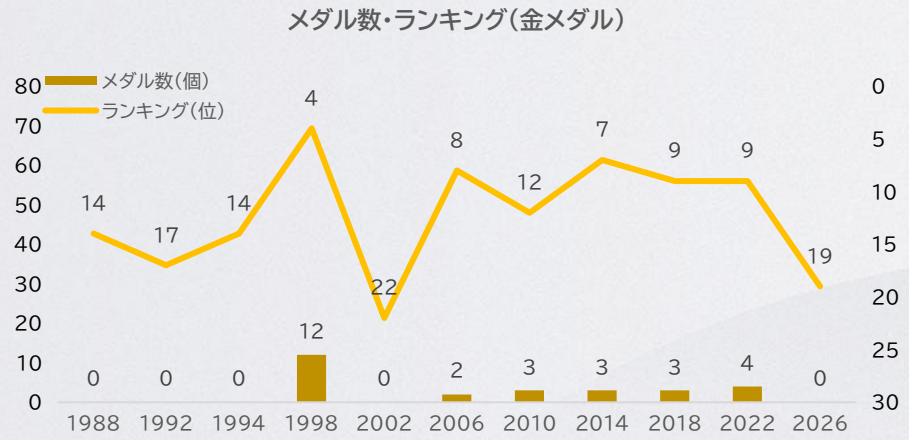
日本代表選手団概要

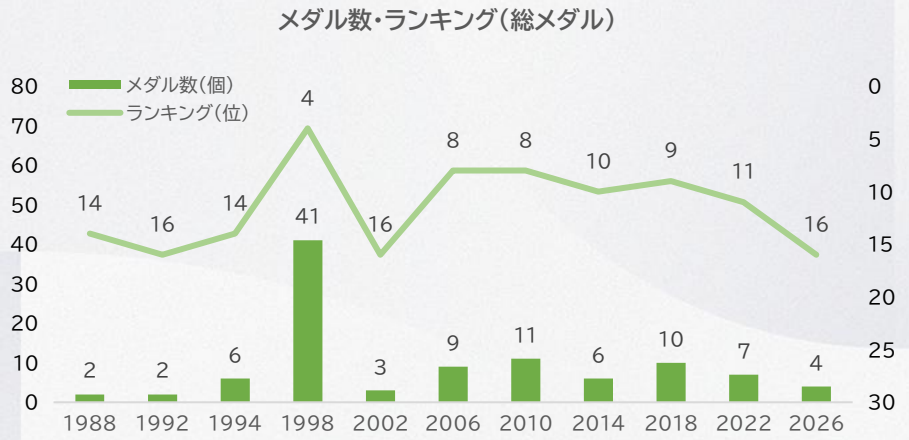
選手団規模	計101名(選手44名、競技パートナー2名、競技スタッフ35名、本部20名)
参加競技	6競技(全競技への参加は平昌2018以降初)
特記事項	● 選手、関係者間の繋がりを深めるため、「挑め、心をひとつに。」というスローガンを策定 ● アルペンスキー村岡桃佳選手がパラリンピック冬季競技大会で日本人最多のメダル(通算11個)獲得 ● スノーボード小栗大地選手が獲得した銀メダルは、パラリンピック冬季競技大会での日本代表選手団として獲得通算100個目 ● 日本代表選手団に初めてウェルフェアオフィサー(WO)を配置。代表決定時から大会期間中まで選手の心理サポートを実施 ● 誹謗中傷から選手を守る事業によるSNSモニタリングを実施。AI等により1847件の記事/コメントが検知されたが、個人及びチームに対する明確な誹謗中傷や批判的な言及は確認されなかった。

Japanese Paralympic Committee

02 日本代表選手団の概要及び競技成績

日本代表選手団のメダル獲得推移(1998-2026)





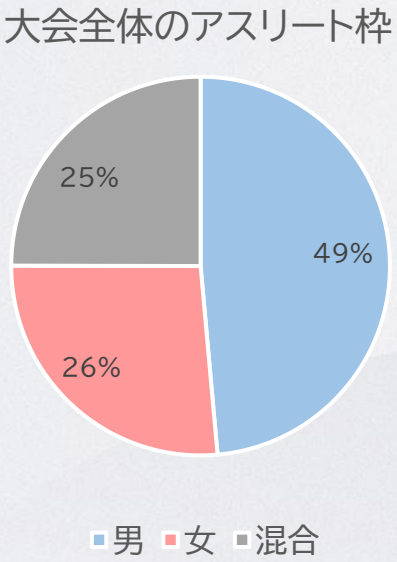
今大会における日本代表選手団の成績

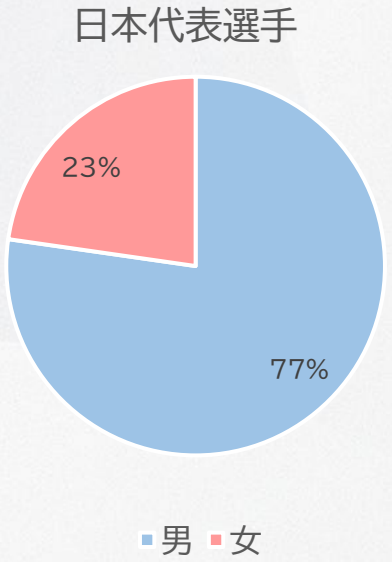
	種目数		AS	NS-CC	NS-BT	SB	IH	WC
エントリー種目	86		25	35	10	14	1	1
1~3位	4	5%	3	0	0	1	0	0
4~8位	24	29%	9	8	0	5	1	1
9~12位	17	20%	6	7	3	1	-	-
13~19位	23	27%	4	8	4	7	-	-
20位以下	10	12%	0	8	2	0	-	-
棄権・未出走等	6	7%	3	2	1	0	-	-

Japanese Paralympic Committee

02 日本代表選手団の概要及び競技成績

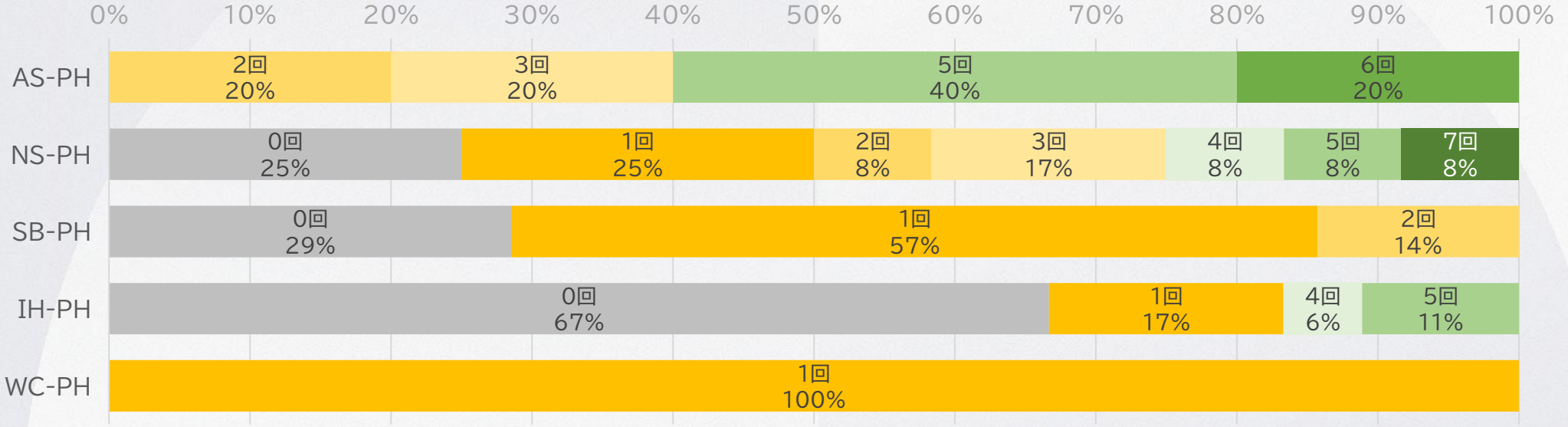
日本代表選手の構成（性別）





日本代表選手の過去PG経験回数（1998-2022）

※夏季PGは含まない



Japanese Paralympic Committee

02日本代表選手団の概要及び競技成績

日本代表選手の年齢

団体名	年齢					
	最年少	最年長	平均(メダリスト)	平均(入賞者)	平均(全体)	中央値(全体)
スキー(アルペン)	29	45	33.0	37.0	36.6	37.0
スキー(ノルディック)	22	51	-	32.3	34.6	34.5
スキー(スノーボード)	31	45	45	37.7	38.1	39.0
アイスホッケー	16	56	-	38.3	38.3	38.5
車いすカーリング	50	61	-	55.5	55.5	55.5
計(全体)	16	61	39.0	40.2	37.8	37.0

ミラノ大会全体におけるメダリストの年齢

競技名	最高	最小	平均	10代	20代	30代	40代	50代	60代
アルペンスキー	42	19	25.4	3%	82%	13%	1%	0%	0%
クロスカントリースキー	51	17	28.0	9%	52%	38%	0%	1%	0%
バイアスロン	39	17	28.1	7%	60%	33%	0%	0%	0%
スノーボード	51	20	30.2	0%	58%	29%	8%	4%	0%
アイスホッケー	40	18	27.5	10%	63%	24%	4%	0%	0%
車いすカーリング	63	24	44.1	0%	10%	24%	38%	19%	10%
計/全体	63	17	28.4	6%	61%	26%	4%	2%	1%
個人種目のみ	51	17	27.1	6%	66%	26%	1%	0%	0%

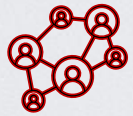
Japanese Paralympic Committee

03 現状/課題および今後の展望

日本の国際競技力について

- ✓ 現状、メダル獲得は一部のトップ選手に依存しており、ソルトレイク2002以降初となる金メダルゼロという結果となった。
- ✓ 一方で、4～8位の入賞が計24という結果となり、メダルポテンシャル（MP）を有する選手が一定数存在していたといえる。
- ✓ 今後は、**新規タレントの強化に加え、4～8位層選手のMPを見極め、メダル獲得レベルへ引き上げる「パフォーマンス転換」への重点投資が必要**である。そのためには、競技別の課題分析（技術・戦術・用具・コンディショニング、ライバル選手との比較等）を精緻化し、国際水準とのギャップを可視化した上で、ターゲットを絞った強化施策を講じる必要がある。
- ✓ 国際競争の激化に対応するため、各国の強化動向やルール変更等の国際情報を継続的に収集・分析し、競技団体の活動へのより迅速なフィードバックを行う体制の構築が求められる。

選手の発掘育成・スタッフ体制について



- ✓ 本大会においては、日本代表選手の平均年齢が37.8歳と比較的高く、大会全体のメダリストの平均年齢（28.4歳）と乖離が見られたことから、次世代選手の発掘・育成から国際レベルへの移行に至るまでのパスウェイの構築は急務である。
- ✓ 今後は、J-STAR事業等で発掘された若手選手について、国際大会経験の付与や専門的サポートを含めた中長期的育成プログラムを構築し、競技力のピークを見据えた強化戦略を推進する必要がある。
- ✓ これらを横断的に支えるため、情報戦略、データ分析、国際連携を担う専門スタッフの育成・配置についても検討が必要である。

トレーニング環境について

- ✓ 冬季競技は欧米を中心とした国際大会への依存度が高く、選手・スタッフは年間を通じて海外遠征を余儀なくされており、経済的・時間的負担の増大や育成世代の参入障壁となっている。
- ✓ 今後は、国内においても安定的にトレーニングおよび競技経験を積むことができる環境整備が重要である。具体的には、オリンピック競技との連携による共用拠点の整備、国内大会の充実、**通年型トレーニング環境（インドアを含む）構築**などを通じて、競技基盤の強化を図る必要がある。
- ✓ こうした環境整備を加速させる観点から、将来的な**冬季オリンピック・パラリンピック競技大会の日本招致を重要な契機として位置付けることが有効**である。
- ✓ これらにより、短期的な強化にとどまらず、**中長期的な競技力向上および持続可能な競技基盤の構築**につなげることが期待される。

Japanese Paralympic Committee